

写真と向き合った3年間

みどりんぐ

大学1年生、18歳、大阪
*取材当時は高校3年生



高校で撮影研究部^{さつえいけんきゅうぶ}に入って写真を始めたころ、部長のよっさんを含む3年生のチームが写真甲子園^{しゃしんこうしえん}¹の予選を通過し、夏に開かれる本戦に進んだ。写真甲子園のことを話すよっさんたちがきらきら輝いて見えた。よっさんたちは被写体の人への接し方もうまいし、写真もすごい。

その理由を撮影研究部の顧問の花畑先生に聞いたら、「写真甲子園を経験してきた違い。1年生とは、人間的な幅の広さも深さも違う」とよっさん(右)



言われた。普通の高校生は自分の身の回りのことしか考えていない。でも、よっさんたちは写真甲子園の予選に応募する写真を撮るために、毎日、撮影に出かけ、写真をとおして学校以外の人や世界に触れていた。自分も、次の写真甲子園には絶対、参加したいと思った。だから、1年生が終わり、次の写真甲子園の準備が始まる時、迷わず参加を決めた。

なにをどう撮ればいいんだろう・・・

毎日、毎日、出かけて写真を撮った。でも、花畑先生や先輩たちに見せると、「これじゃ写真甲子園の本選には行けない。真っ正面からドカンと被写体に向きあってるだけ。その撮影に対する気持ちはいいけど、もっと背景を入れたり、いろいろなカットやアングルを混ぜたほうがいい。技術が足りない」と言われる。何をどう撮ったらいいのかわからなくなって、ちょっとしんどかった²。それでも、毎日、撮影に出かけるうちに、少しずつ技術が身についてきた。それまでは、知らない人にうまく話しかけられなくて人の写真はあまり撮らなかつたけど、人の写真を撮れるようになっていた。でも、結局、予選を通過することはできなかった。

このあと、みんなに写真がうまくなったと言われることが多かった。でも、わたしにとっては、「うまい」はほめことばではない。「おもしろい」って言われたい。この頃から、あまり写真を撮らなくなった。撮ろうかなと思っても、写真になったところを想像して、「おも

しろくないなー」と思って撮らないことが多かった。

そんなとき、学校のイタリア研修旅行に参加することになった。2年生の12月だった。花畑先生には、「これは次の写真甲子園の練習。ここでいい写真が撮れなかったら、写真甲子園もダメだ」と言われた。モノクロフィルムを何十本も持って出かけた。7日間の滞在中、風景や人などいろいろなものを撮った。このとき、なんでも撮りたいという気持ちがまたわいてきた。撮った写真も、みんなに「いい」って言われて、自信がついた。「いいって思ったら、撮ればいいんだ」と思えるようになった。



2年生の12月に参加したイタリア研修旅行のときに撮った一枚

自分の気持ちが自然に入り込んだ写真を撮りたい

翌月、最後の写真甲子園への挑戦が始まった。前は、先輩たちが中心だったけど、今度は自分たちの力で作品をつくりあげられる。「組み写真の8枚全部、自分の写真で埋めるぞー。わたしの力でみんなを本選に連れてってあげるよー」って気合が入った。みんなで決めたテーマは、たこ焼き³。大阪らしさも出るし、たこ焼きと人との関わりも写せるから。

最初は、道頓堀⁴で、「元気はつらつ、たこ焼き食べてます」というコンセプトで、「はい、もっと大口を開けてくださいー」、「はい、こっち見てー」と指示を出して、演出した写真を撮っていた。

あるとき、家の近くの下町のたこ焼き屋で写真を撮った。自然な雰囲気でお店の人と会話をしているうちに、その人の人生もほんの少し聞くことができた。「何十年もここでたこ焼き屋をやってる」と聞いて、「あー、すごいな。このたこ焼き屋



たこ焼き

はず一とここにあって、このおじちゃんもず一とここで生活して
るんだ」と感動した。そのときに撮った写真は、自分のそういう
気持ちがず一と自然に入り込んだ写真だった。自分が撮りたい
のはこういう写真だと思った。

自分なやってんねん!

写真甲子園への挑戦はとにかく苦しい。毎日、毎日、撮影に
出かけても、思うような写真はなかなか撮れない。先生や卒業
した先輩たちにもさんざんだめだと言われる。そのときは落ち込む
けど、とにかく写真を撮らないといけないから、浸っているひまも
ない。自転車でたこ焼き屋を回りながら、「自分なやってんね
ん⁴⁵」と自分に腹が立って、泣きそうになるのを自分の太ももを
バーバーンってたたいてこらえた。「自分がいちばんがんばらな
いと!」って自分に喝を入れた。

そんなとき、よっさんが手紙をくれた。「学校が終わったら、撮
影に行って、現像して……。そんな毎日になって、それを続けて
いたら5月にはうまくなっているし、自然と8枚の写真が組めると
思ったら、それは大間違いだよ。なんでたこ焼きを撮りたいと思っ
ているのか、はっきりさせないとだめ。がんばれ!」って、すごく
応援してくれた。よっさんは、わたしたちのことを本当によくわかっ
てる、同じ気持ちで考えてくれてると思った。

苦しんで見つけたもの

わたしたちにとってたこ焼きってなんだろうと、ずっと考え続け
た。下町のたこ焼き屋を撮るうちに、たこ焼きはただ大阪の名物
というだけでなく、子どもから大人までみんなが食べていて、み
んながたこ焼きに対して愛を持ってんじゃないかを感じるように
なった。ある日、たこ焼き屋ののれんにぶらさがって遊んでいる
女の子の写真を撮った。お母さんはお店のなかで働いている。



写真を撮り始めたばかりのころの作品。この頃は、真正面
からドカーンと被写体に向かってた。花畑先生にも「おも
しろいなー。性格が出る」と言われていた



最後の写真甲子園に取り組んだときに撮った写
真。いちばん気に入っている写真の1枚

女の子はどこか寂しそうに見えた。古いお店のたたずまいも、歴
史を感じさせた。見ていていろいろなことを考えさせられる写真
で、自分でも納得できる一枚だった。

結局、みんなで選んだ予選の応募作品の8枚のなかに、わ
たしの写真は一枚も入らなかった。写真甲子園の予選を勝ち抜
くために、みんなで話し合っ、インパクトのある写真で8枚の組
写真をつくろうということになった。そのときの8枚は、みんなで
これしかないって話し合っ選んだし、自信作だった。でも、本
戦に進むことはできなかった。

写真甲子園に取り組んだ6ヵ月間、本当に苦しくて、しんどい
毎日だった。それでも、これに挑戦しなかったら今の自分はなかつ
たと思う。花畑先生のことばが胸に残っている。「『全然撮れない、
うーん』って苦しんでいるときは実は階段を登ってるときで、階
段のぼを登りきったそのときには自分が変わったのがわかる」。

見た人の想像が広がる写真を撮り続けたい

自分が下町で撮った写真は、自画自賛かもしれないけど、今
見ても本当にいいなあと思う。インパクトはないけど、そこにそつ
とたこ焼きがある雰囲気の写真で、撮ったときの自分の気持ちが
伝わる写真だと思う。見ていて、写っている人の人生とか、その
場の時間の流れとか、いろいろなことを考えさせられる。

大学では写真を専攻することに決めた。先生たちには高校で
も専攻していた美術を専攻するよう勧められたけど、自分が一生
かけてやるのは写真だと思うから。写真はその瞬間を切り取って
記録するもの。たとえば、戦後のころの家をどれだけ絵で描いても
「ふーん」で終わるけど、写真だと「おっ」て思う。それは、そ
こにリアリティがあるから。わたしも、写真で今の時代を切り取っ
て残したいと思う。見た人の想像力が広がるような写真を撮り続
けていきたい。そして、はじめて口にするけれど、将来は写真家
になって、自分の作品集を出したい!

Notes

- *1 参関「今日日本」。面向高中生的全日本摄影大赛，每
年7月在北海道举行。在各地区的预选赛中获得胜的小
组才有资格进入全国大赛。みどりんぐ(Midoring)
所在学校的摄影研究部，组成志愿参赛的学生小
组，每年1月左右确定题材，到截止日期的6月10日
前，选定由8张组成的参赛照片。
- *2 “烦恼、痛苦、累”的大阪方言。
- *3 将面粉用调味汁打成糊状，中间放进切成小块的章
鱼肉，烤成乒乓球大小的圆球形小吃。
- *4 位于大阪市南部的闹市区，有很多餐饮店聚集于
此。
- *5 “我究竟在干什么？”的大阪方言。

全力以赴地参加摄影活动

上高中时加入了摄影研究部，开始摄影之后不久，由部长“よっさん”等人组成的高三组在摄影甲子园预选赛中出线，入围夏季举办的正式选拔赛。“よっさん”他们每每提到摄影甲子园的话题时，就会神采奕奕，让人格外羡慕。他们不仅善于接触拍摄对象，拍出来的照片也很精彩。我向担任摄影研究部顾问的花畑老师请教了其中的奥妙，老师告诉我说：“是摄影甲子园的经历让他们与众不同，和一年级的学生相比，人生经验和阅历也有很大差异。”一般的高中生只会想到自己身边的事情，但“よっさん”他们为了拍摄参加摄影甲子园预选赛的照片，每天都会外出取景，通过拍照的过程，接触校园外面的人和世界。由此，我也暗暗下了决心，一定要参加下一届摄影甲子园比赛。因此，在一年级结束时的新一届摄影甲子园活动开始筹备时，我便毫不犹豫地决定参加了。

究竟拍什么、怎么拍好呢……

日复一日地外出拍摄。但是，花畑老师和高年级同学们看到我拍回来的照片，都说“这种水平够不上参加摄影甲子园的正式选拔。拍摄还仅仅停留在从正面将镜头瞄准拍摄对象的层次上，干劲倒是可佳，但如果能够加入一些背景、运用一些剪切和角度变换技巧的话则会更好。技术方面还欠把火”。说得我不知所措真有点受不了了。尽管如此，在每天外出拍摄的过程中，我一点一点地掌握了一些技术。在那之前，我不善于跟陌生人搭话，很少拍人物照片，但是，现在已经能够拍这样的照片了。但遗憾的是，最终我们没能通过预选赛。

那之后，大家经常夸我拍摄技术有了进步，但是，对我而言，“技术好”并不是一种夸赞，我希望大家说我拍得“有趣”。从那时开始，我逐渐开始不拍照片了。很多时候，即使有想拍的冲动，但只要一想到拍出来的照片“没趣”，便放弃了拍摄的念头。

在那前后，我参加了学校组织的意大利进修旅行。那是12月份，我正在读二年级。花畑老师说：“这次是下届摄影甲子园的演习。如果在这里拍不出好作品，那么摄影甲子园也没有希望了。”我带了几卷黑白胶卷，在7天的旅行中，一气拍了风景、人物等很多东西。这一次，又重新找回了什么都想拍的感觉。拍回来的照片，大家都说不错，大家的鼓励给了我信心，我想“觉得不错的就应该拍下来”。

拍摄能自然融入自己情感的作品

第二个月，迎接摄影甲子园最后的挑战开始了。上次是以高年级同学的作品为中心，这次则要靠我们自己的实力来拍摄作品。我给自己定的目标是：“8张组合照片要全部由自己来拍！凭借自己的力量，带领大家打入正式选拔赛！”大家商定的拍摄主题是“たこ焼き”（烤章鱼球），这既能体现大阪的特色风情，又能反映出烤章鱼球与人际联系。

刚开始，我们在道顿堀，以“朝气蓬勃，吃烤章鱼球”为题，进行编排拍摄，指示拍摄对象“好，嘴巴再张大一点！”、“好，看这里”等像拍戏似的拍了一些照片。

有一次，我在自己家附近老城区的烤章鱼球店里拍摄。在跟店主闲聊的过程中，还了解到店主的一些阅历，“我在这里经营烤章鱼球店已经好几

十年了”店主说。这话让我很有感触，“太厉害了，这家烤章鱼球店早就在这里啦，这位大叔的大半辈子一直生活在这里啊”。那次拍的照片中，自然而然地融入了自己的情感。我觉得自己想拍的就是这样的作品。

我究竟在干什么？

挑战摄影甲子园的经历的确很艰辛，虽然天天都出去拍摄，但总是拍不出自己想拍的作品。还不止一次地被老师及已经毕业的高年级同学找出很多毛病。那时候很泄气，但还是不得不拍，也没有时间消沉。一边骑着自行车挨家跑烤章鱼球店，同时又恨自己不争气，“我究竟在干什么？”我拼命地捶自己的大腿来压住想哭的心情。“自己不领头加油怎么行！”

就在那时，我收到了“よっさん”的来信。信中说“如果想只要放学后去拍照，然后冲洗成照片……。每天的生活如此周而复始，到了5月便能水到渠成，自然而然地就能挑出8张照片，那就大错特错了。重要的是一定要弄清楚为什么想要拍烤章鱼球？加油啊！”我觉得“よっさん”真的很理解我，他是设身处地的为我着想了。

苦后的发现

我一直在想，对我们来说，烤章鱼球是什么呢？在老城区拍摄烤章鱼球店的过程中，我逐渐发现，烤章鱼球不仅仅是大阪的特产，它还是一种从孩子到夫人都吃、都爱的小吃。有一天，我拍到一个小女孩儿正拽着烤章鱼球店门帘玩耍的照片，她妈妈在店里工作。小姑娘的模样流露出一种莫名的寂寞。陈旧的店铺、老街的风情让人感受到时代的流逝。这是我自己比较满意的一张照片，看着看着，能让人浮想联翩。

最后，在大家选出的8张预选赛送选作品中，我的照片一张也没有被选中。为了在摄影甲子园的预选中获胜，大家商量后决定挑选8张有份量的照片组成一套。选出的8张照片都是大家一致认为有把握的最佳作品，可惜，还是没能进入正式选拔赛。

在为摄影甲子园忙碌的6个月里，真的是每天都很累、非常辛苦。但是，我想如果没有这段挑战的经历，也就没有现在的自己。花畑老师的话至今仍让我记忆犹新，“当你苦于‘一点都拍不好’的时候，其实正是你跨上一个台阶的时候，当你上完所有台阶的时候，你就会发现自己的变化了。”

不断拍出让人浮想联翩的作品

或许是我自卖自夸，现在看自己当时在老城区拍的照片，仍然觉得相当不错。虽然没有震撼力，但在照片中，能够感受到烤章鱼球特有的氛围，表达了自己拍摄时的心境。看到照片，会不由自主地想到很多东西，例如照片里人物的生活、时间的流逝等等。

我决定在大学里学习摄影专业。虽然老师们都劝我选择美术专业，但是我愿意毕生从事的工作还是摄影。摄影是截取某个瞬间，把它记录下来。例如，描绘战后时期的房屋，不管是怎么画只会让人稍有触动，而照片则会让人感叹不已。因为照片有真实感。我也能够通过照片来截取当今的时代，把它记录下来，希望不断拍出让人浮想联翩的作品。还有，这是我第一次吐露，我希望将来成为一名摄影家，出版自己的作品集！

（本文为“人物采访”的中文版）

雑学博士：外来語

新しい技術に関する言葉は外来語として定着するものが増えています。次の1～10は日本語ではどう書くでしょう。英語をヒントにして下のa～jから選んでみましょう。

- | | | | |
|-------------------------|-----|-------------------------|-----|
| 1. 打印机：printer | () | 6. 胶卷：film | () |
| 2. 优盘：memory stick | () | 7. 文件夹：folder | () |
| 3. 电脑：personal computer | () | 8. 电子邮件：e-mail | () |
| 4. 数码相机：digital camera | () | 9. 电脑病毒：computer virus | () |
| 5. 数据：computer data | () | 10. 电邮地址：e-mail address | () |

- | | | | | |
|------------------|---------|------------|---------|---------------|
| a. デジタルカメラ（デジカメ） | b. パソコン | c. プリンタ | d. データ | e. USB メモリ |
| f. メール | g. フィルム | h. メールアドレス | i. フォルダ | j. コンピュータウイルス |

★回答はウェブに掲載しています (<http://www.tjf.or.jp/hidamari/>)。



ひだまり

第35号

2008年6月

目次

今日日本

撮影

日本人的日常娱乐活动



人物采访

写真と向き合った3年間



発行 (財) 国際文化フォーラム
編集人 中野佳代子
編集・制作 飯野典子
大船ちさと
千葉美由紀
長江春子
翻訳・校閲 シンプルデザイン

〒163-0726
日本国東京都新宿区西新宿 2-7-1
新宿第一生命ビル 26 階
財団法人国際文化フォーラム
電話：81-3-5322-5211
ファックス：81-3-5322-5215
Eメール：hidamari@tjf.or.jp
URL：http://www.tjf.or.jp/

TJFのウェブサイトをご活用ください!

(財) 国際文化フォーラムではウェブサイトで、日本の中高校生や文化、社会事情に関する情報を提供しています。特に日本語の授業で活用できる情報を掲載しているサイトを紹介します。

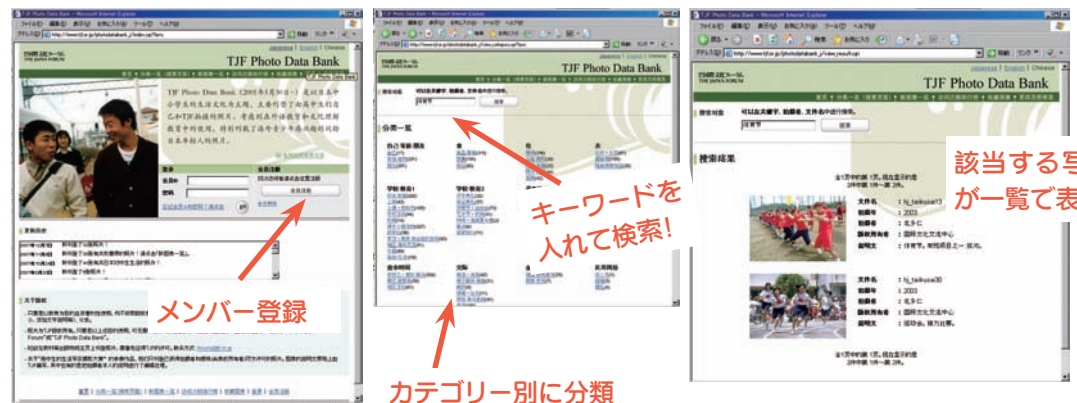
●「ひだまり」ウェブサイト (<http://www.tjf.or.jp/hidamari/index.htm>)

このサイトには、本誌『ひだまり』の「雑学博士」コーナーの答えやヒント、補足説明などを紹介しています。本誌には掲載していないクイズが載っていることもあります。また、「今日日本」の日本語版を掲載しています。そのほか、これまでに発行した『ひだまり』のいろいろなコーナーの記事も読むことができます。たとえば、「教学設計」では『ひだまり』を使った授業案をテーマ別に紹介しています。「ヒント箱」では、類義語の使い分けや日本語の学び方・教え方を紹介しています。また、「声の広場」では中国の日本語の先生方から寄せられたお便りや日本の高校生生の作文を紹介しています。



●「TJF Photo Data Bank 日本編」ウェブサイト (http://www.tjf.or.jp/photodatabank_j/index)

このサイトには、日本の中高校生の生活文化や素顔を伝えているものを中心に、日本の文化、社会、自然、そのなかで生きる日本の人びとの姿を表現している写真を掲載しています。最初にメンバー登録をすれば、無料で写真をダウンロードして授業で使うことができます。現在、カテゴリー別に分類された3,400枚以上が収録されています。日本語や中国語でキーワードを入れて、検索することもできます。



お知らせ：今号から誌面が変わりました。前号まで掲載していた「教法指針」は、今後ウェブサイトの新しいコーナーで掲載します。新しいコーナーは9月に開設する予定です。
お願い：『ひだまり』は各学校の先生方宛にお送りしています。学校の住所が変わったり、勤務先が変わったりしたときには、ぜひ編集部まで、ファックスかメールでご連絡ください。よろしくお願いたします。

摄影

日本人的日常娱乐活动

随着带摄像功能手机和数码相机的出现，照片离人们生活更近了。作为一种便捷的表现手段，用照片来记录日常生活的人越来越多了。

从胶卷向数字技术的转换

说起照片，以往人们所熟悉的流程还是先去买胶卷、拍摄，然后带着拍完的胶卷到照相馆或便利店冲洗，最后取底片和洗好的照片。但现在，许多人用数码相机拍摄后，将照片保存在电脑里，然后使用家用打印机打印需要的照片。坐落在街头巷尾的照相馆渐渐消失了踪影。如今人们说起照片，越来越多的人首先想到的不是照在胶卷上的图像，而是保存在优盘里的数据。

根据内阁府提供的“有关主要耐用商品等的普及率调查报告(截止2007年3月末)”，日本全国的约4,780万户家庭中，有58.9%的家庭拥有数码相机；而使用数码相机不可缺少的个人电脑拥有率也已上升到71.0%。

日本国内数码相机的价位在3~5万日元之间，购买1卷胶卷和冲洗照片的费用加在一起约为1,500~2,000日元，两者相比较，数码相机的费用并不是很高。而且，随着具备防抖动、面孔识别及光圈、焦距自动调节等功能的数码相机面世，人人都可以简单地拍摄高质量的照片了。

数码相机在很大程度上改变了人们的摄影方式和对照片的欣赏方式。以前，人们想要照相就必须去买胶卷，还必须将拍得好坏不得而知的胶卷送出去冲洗，既浪费钱又浪费时

间。而使用数码相机之后，人们可以当场确认照片拍得如何，拍得不好可以马上重拍，拍完的照片可以挑选打印，既省钱又省时间，这样一来，人们可以放心地大量拍摄照片。而且，不再需要拘泥于某个特别的日子，可以像记日记一样拍摄日常生活中自己喜欢和感兴趣的东西。

拍摄完的照片，人们可以在电脑里简单地加工，用自己拍摄的照片制作贺年片、自制写真作品集。从摄影到打印，均可以按照自己的喜好，亲手完成所有的程序。

过去对摄影不熟悉的人，现在也可以轻松愉快地享受摄影的乐趣。从这一点来看，数码相机的功劳还是很大的。



用手机拍摄照片



日本的手机普及率很高。目前，从小学生到上了年纪的人中许多人都有手机。在高中生中的普及率已经达到90%以上。随着手机功能的增加，很多高中生的手机用途，除“打电话”之外，与“发邮件”、“计时与闹钟”、“浏览网页”、“欣赏音乐”等并列的还有“拍摄照片”。

以前，如果没有携带相机或摄像机的人在场，就无法拍摄的事件或事故影像，现在，由一般大众用手机拍摄后在新闻中播出的次数越来越多。同时，不仅仅是记录在旅行和各类活动中发生的特别事情，还用摄影代替展场笔录，将每天发生的事情拍下来发表在博客上代替写日记等等。在日常生活

中，人们越来越频繁地选择了摄影。

随着手机“拍客”数量的增加，出现一些定期刊载介绍拍好手机照片的摄影杂志、以手机摄影为对象的摄影大赛以及手机摄影作品的写真集。此外，由于许多手机具有转发图片的功能，将拍摄的照片发送给朋友，和朋友分享欢乐等也变得越发简单了。

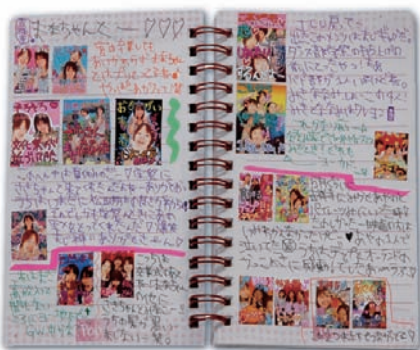


在东京浅草寺的雷门前，人们正用手机拍照。

大头贴

大头贴在日文中被称作“プリクラ”是“プリント倶楽部”（打印俱乐部）*的简称。在机器自动拍下客人的表情和动作后，用不了几分钟，便可做成几张或十几张可作贴纸的照片。拍这种大头贴一次只要300~500日元，客人可以随意加入边框和花纹，还可以在照片上加注简短的文字。这种贴纸，是只属于自己的原创作品，可以贴在自己喜欢的各种地方。大头贴自1995年在游戏中心登场以来，一直受到以女中学生和年轻女性为主要消费群的钟爱。用来贴大头贴的专用相册称为“プリクラ手帳”（大头贴手册），简称“プリ手帳”（贴贴簿）。使用者除了大头贴之外，还贴上各种各样的贴纸、用彩色铅笔和水彩笔画上各种各样的花纹，记下自己当时当地的心情留作纪念。

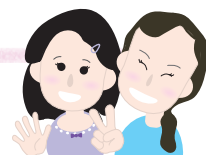
大头贴的魅力，不仅仅在于和朋友一起不加拘束地拍摄、体验以游戏感觉制作照片的喜悦，共享大头贴、交换大头贴，是朋友间友情的见证、是对此时此景的一种纪念。大头贴的出现，使摄影和影集制作变得越发简单，越发贴近生活。



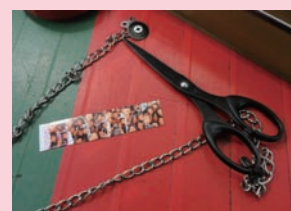
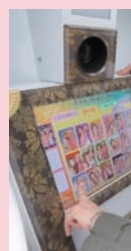
“プリクラ手帳”（大头贴手册）

*从严格意义上讲，“プリント倶楽部”（打印俱乐部）是注册商标。但具有相同功能的其他公司产品，一般也称作“プリクラ”（大头贴）。

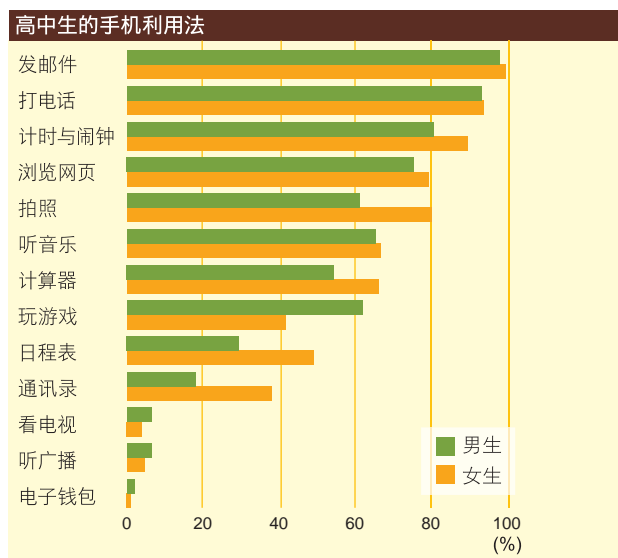
与朋友一起拍大头贴!!



排放在游戏中心里的大头贴机



为了方便将做好的大头贴分给各人，还备有剪刀



資料:金融広報中央委員会「子どものくらしとお金に関する調査」(2005年度)

梅佳代さんの作品は、著作権の関係で掲載できません。『ひだまり』第35号本誌をご覧ください。『ひだまり』第35号をご希望する方は、hidamari@tjf.or.jpに、件名「ひだまり希望」としてメールをお送りください。



轻轻点击大头贴的触摸屏，则可以选择背景及花边。



照明设备可谓专业级别。对着屏幕上端设置的相机，摆好姿。



拍完后，再用连接在大头贴机上的专用笔，直接在照片上加写文字及纹样。



完成的大头贴。只需几分钟就能做好。



加写完毕的画面。经常加写上日期、地点、简短的留言、以及成员的有关事情。



コラム内の写真 © 北郷仁

备受瞩目的青年摄影家——梅佳代！

随着数码相机和手机摄像功能的普及，摄影活动已经成为人们日常生活中的一大乐趣。越来越多的人可以在日常生活中随时记录下有趣的、快乐的以及新奇的事物。在摄影变得越来越贴近生活的当今日本，梅佳代是一位引人瞩目的摄影家。梅佳代善于捕捉在日常生活中无论是谁都曾有或应该曾有所见的、决定性瞬间。看她的作品，仿佛让人有身临其境的错觉。诙谐、思忆以及属于自我的难以忘却的美好记忆……的确令人心潮澎湃。梅佳代的作品中，充满着那些卖弄技巧和刻意表现的摄影作品所没有的、令人悸动的光辉。

2006年，梅佳代出版了第一部写真集『うめめ』，创下了11万部的销售记录（2008年3月统计），这在写真集中是罕见的。2007年，荣获第32届木村伊兵卫摄影奖^{*}。同时，梅佳



『うめめ』
(リトルモア 2006年発行)

代还结集在大阪读摄影学校时，以附近小学男生为题材拍摄的作品，以『男子』为题出版，创下4万部的销售记录，成为人们热烈谈论的话题。不仅如此，梅佳代的作品在东京、巴黎、伦敦、曼谷等地举办的摄影展中也



『男子』
(リトルモア 2007年発行)

获得了极高的评价，并在报纸、杂志、电视等媒体上成为人们关注的焦点。

梅佳代的作品之所以受到人们欢迎，或许是因为她的作品看上去好像是自己也可以抓拍到的普通日常生活，但实际上却是自己绝对捕捉不到的瞬间。

^{*} 木村伊兵卫摄影奖

1975年，朝日新闻社为了表彰在二战前后为日本摄影事业做出贡献的摄影家木村伊兵卫（1901-1974）设立的奖项。该奖的评审标准不分专业或业余，也不受年龄限制，旨在表彰在摄影创作和发表活动中表现出色的新人。历届的许多获奖者，作为日本代表性的摄影家，至今仍然活跃在摄影第一线。

コラム内の写真 © 梅佳代

高中生的摄影活动

在越来越多的人可以随意体验摄影乐趣的同时，日本全国约有 6000 所学校拥有高中摄影俱乐部或摄影小组，高中生们在课余时间开展摄影活动。作为高中生们展示日常活动的成果和发表作品的平台，除了学校的文化节，还有各都道府县的高中文化联盟摄影部举办的摄影大赛以及摄影杂志每月定期刊载的摄影竞赛。

读卖新闻主办的“读卖摄影大赛”高中部门

<http://www.yomiuri.co.jp/photogp/>

读卖摄影大赛由读卖新闻社每年举办一次。参赛者不分专业还是业余，日本全国的摄影爱好者都可以参加。大赛分为拍摄事件和事故图片的报导部门、主题部门、高中部门、中小学部门和家庭部门等。

高中部门里又分为“自由选材”和“图片散文”两部分。“自由选材”要求从校园活动及日常生活出发，站在高中生的角度，以自己的独具慧眼去捕捉生活中的场面；“图片散文”要求选一名高中生为主人公，用 5 张以内的组合照片和大约 200 字的散文来表现主人公的人物形象及摄影者的构思。

2007 年刚刚结束的 TJF“高中生的生活写实摄影大赛”，将接力棒传给了“图片散文部”，TJF 以协办单位的名义为其提供支援。一部分获奖作品将继续刊载在 TJF 的网站和出版物上，并将向海外的高中生进行宣传。

摄影甲子园*

<http://town.higashikawa.hokkaido.jp/phototown/koshienofficial.htm>

摄影甲子园是从 1994 年开始，在北海道东川町一个人口不足 8000 人的城市中举办的日本全国性摄影大赛，主要以全日本高中摄影俱乐部及摄影小组为对象。东川町推出以摄影文化来振兴城市产业的活动，除了摄影甲子园之外，还设立了国际摄影奖“东川奖”、国际摄影节以及在文化展馆举办摄影展等。



© 写真甲子园 2007

摄影甲子园的特征是，不是以个人名义，而是以高中摄

影俱乐部及高中摄影小组等团体名义参加，每所学校只能选送一组作品。作品的主题和体裁不限，由 4~8 张照片组成。每年，全日本有 200 多所学校参赛。由摄影家、杂志编辑组成评审团，对来自日本全国 8 个赛区的作品进行初步审查。最后，在初选中获胜的 14 所学校将各派出 3 名选手和 1 名指导老师，代表自己的赛区参加 7 月在东川町举办的决赛。



© 写真甲子园 2007

决赛中，各个代表队将使用相同的相机，在相同的区域，进行为期四天的选景摄影。将拍好的照片输入电脑中进行筛选，按选定的主题及规定的张数确定提交的组合照片。作品经过评审团公开审查后，得分最高者为优胜。在规定的时间内，拍摄尽可能多的照片，并编辑组合成参赛作品，这一过程需要参赛选手们的密切配合。从共同的目标出发，彼此交换意见，克服种种困难，最终完成作品的过程，可以让每个参赛选手都得到锻炼，受益良多。

同时，来自当地的高中生、家长（母亲）和镇上的居民以及曾经参加过比赛的老选手等多方面的支持也成为大赛运营的原动力。除了能结识评审员、其它学校的参赛选手，还能与热情好客的当地人交流，或许也是摄影甲子园的魅力之一吧。

决赛的实况不仅在电视中播出，有些还被改编成漫画。参赛选手通过作品结交伙伴以及磨练自我的成长过程感动着许多人。

*甲子园

位于日本兵库县的棒球场。除了职业棒球比赛以外，每年的全日本高中棒球冠军赛、高中棒球预选赛也都在这里举行。因此，“甲子园”这个词也指代这些比赛，成为高中棒球选手们憧憬的地方。慢慢地，除棒球之外，“甲子园”也被用于指代特别是由文科高中参加的全国规模的比赛（如漫画“甲子园”，舞蹈“甲子园”等）。



© 写真甲子园 2007